

出題意図

基礎能力試験型は、マークシート方式を採用しており、英語の基礎的な知識と読解力を確認することをねらいとしている。出題者が受験生に求めているのは主として次の点である。

- ①基本的な英文法・英単語・熟語をマスターしていること。
- ②語句の意味・用法と文法を正確に踏まえ、英文を総合的に理解できること。
- ③英会話に親しみ、会話の流れを理解できること。

講評

① 長文総合問題。英文要旨：ヒゲペンギンは、ヒナや巣を守るため、子育ての期間は長く眠ることはなく、一回数秒の睡眠を何度も繰り返していることが研究によって明らかになってきた。

設問1 正答はア。イとウの内容は第1パラグラフに書かれている。

設問2 空所補充問題。空所Aには「凍ること」という意味のfreezingが入る。keep O from ~ingは「Oが~するのを防ぐ」。空所Bには「~をねらう」という意味のtargetが入る。その前の文に「ヒゲペンギンの親は見張りをしなければならぬ」と書かれており、ここではその理由が述べられている。空所Cにはアが入る。attachは「~をとりつける」という意味の動詞。

設問3 第2パラグラフの4～5行目に、他のペンギンが卵を保護するための石を巣から盗むことがあると書かれている。正答はウ。

設問4 下線部の語の意味を選択する問題。(1) lastは「続く」という意味の動詞。正答はア。(2) revealは「~を明らかにする」という意味の動詞。正答はウ。

設問5 第3パラグラフの6～8行目にアの内容が書かれている。

設問6 第4パラグラフの最初の文にウの内容が書かれている。

設問7 第5パラグラフの最初の文にイの内容が書かれている。

② 会話文の問題。TakuとClaudiaが、救急車の利用の仕方について話している。

設問1 下線部(1)のcasesは「症例・患者」という意味。正答はア。イは「容器」。ウは「訴訟・判例」。

設問2 空所補充問題。空所Aにはイが入る。ここで話題になっているのは、救急車の利用が有料か無料かということである。空所Bには、「救急車の料金が高くなれば問題になるだろう」というClaudiaの意見に対する応答として適当なものを選ぶ。正答はア。空所Cには、ウが入る。緊急性がないのに救急車を呼ぶ人が減れば、本当に必要としている人に集中できるというClaudiaの意見にTakuは賛成しており、それに沿った内容のものを選ぶ。

設問3 下線部の語の意味を選択する問題。(2) coverは「(費用などを)まかなう」という意味の動詞。正答はイ。(3) burdenは「重荷・負担」。正答はウ。(4) in the long runは「長い目で見れば・結局は」。正答はウ。

設問4 9～10行目のClaudiaの言葉が、イの内容と一致する。

設問5 11行目で述べられている、料金が高ければ救急車を呼ぶことをためらう人もいるのではないかと、というTakuの疑問がウの内容と一致する。

③ 短文空所補充問題。単語、熟語の適切な用法を選びとる能力が問われる。1. by the time ~で「~する時までには」という意味になる。正答はエ。2. 過去形が使われていることに着目する。正答はウ。「どんなに力を込めてもねじは回らなかった」という意味になる。3. 正答は「乱用・悪用」を意味するア。human rights groupは「人権団体」。4. 正答は「姿を消す」という意味のア。declineは「減少」。5. 正答はcatchの過去形のア。catch sight ofで「~を見つける・~が目に入る」という意味になる。6. 正答はイ。動作を表す動詞の現在形は、繰り返される動作を表す。7. 正答はウ。remain to be doneは「まだなされていない状態である」という意味。8. 正答は「材料・成分」を意味するイ。

④ 並べかえの問題。1. have trouble ~ingで「~するのに苦労する」という意味になる。2. 所有格の関係代名詞whoseを用いた構文。whoseの後ろには必ず名詞が置かれる。3. keep in touch withで「~と交際を続ける」という意味になる。

受験生へのアドバイス

出題者が受験生に求めているのは、オーソドックスな学習の成果であり、高校のリーディングの教科書がきちんと理解できる力がついていれば解ける問題であると考えている。

ただし、「きちんと」理解できることが重要であり、「なんとなくわかる」というレベルでとどまらないようにしてほしい。基本的な単語・熟語の習得はもちろんのこと、英文の構造をしっかり把握して、一つ一つを論理的に正確に理解していくことが、外国語学習においては特に重要である。

出題意図

高等学校で学習する内容を基盤とし、大学での学びに必要な知識問題、及び文章内容を理解する基礎的な力があるかどうかを確認するための問題となっている。解答形式はすべて選択式である。具体的には、大問1においては語彙力を問う問題10問、大問2においては文章読解力を問う問題15問、合計25問を出題している。

大問2は、4000字あまりの説明的な内容をもつ文章を課題文としているが、著者の論述に従いながら、各段落の意図を把握しつつ、その理解が文章全体にまでひろげられるか、また自身が読み取ったことをもとに、問われていることについて適切な解答を導き出せるかを重視している。その過程において、漢字を読み書きする力や基本的な語句の意味、慣用句の知識なども必要になってくる。

講評

大問1は、言葉の意味を問う問題、漢字の二字熟語の類義語・対義語・組み立てを問う問題、慣用表現の意味を問う問題、四字熟語を完成させる問題、四字熟語の意味を問う問題、助詞の意味・用法を問う問題からなる。いずれも基本的な知識を問うものである。

大問2は、源河亨氏の『「美味しい」とは何か』から出題した。課題文は、「味やおいしさは言葉にできないと言われる」という点をきっかけとして、味覚と言葉の関係について論を述べていく。そしてさまざまな場面や言葉を挙げて、味覚を言語化するにはどんな困難があるかを述べていく。言葉による区別は知覚による区別よりも粗いということがその中心となるが、それぞれの例がどのように著者の主張と結びついているのか、しっかり理解して読み進める必要がある。

そのうえで後半は、完全に言語化することができないにしても、体験を言語化することにはどんな意味があるのかを、さらにさまざまな例を通じて説明していく。後半についても、著者が挙げるさまざまな具体例と著者の主張との関係を的確に読み取ることが大切である。

受験生へのアドバイス

大問1については、基礎的な国語知識が問われるため、日頃から言葉の意味に関心を持って、類義語や対義語、慣用句や四字熟語、漢字熟語の構造などの知識を増やしてほしい。

大問2に関しては、さまざまな種類の説明的な文章（論説文）を読んで慣れることが大切である。論説文は一見読みにくく感じられるかもしれないが、必ずテーマとそれを説明するための例で成り立っている。だからテーマをたどれば必ず著者の主張を知ることができ、その主張を補強するために紹介されるさまざまな例の意味を理解することができる。一見難解に感じられるかもしれないが、論説文の文章は筋道から外れることはなく、また書かれていないことが出題されることもない。さらに、難しいところには必ず著者の解説が付されている。

第一印象にとらわれることなく、根気強くいろいろな文章を読んで慣れていってほしい。大学での学びにおいて、論説文を読みこなすことは、必要不可欠の基礎力である。新聞や新書、現代文の問題集など、より多くの論説文を読むようにしてほしい。

出題意図

高等学校での数学学習の基礎となる数学Ⅰ・数学Aから幅広く出題した。大問4題を設定した。問①では、数学Ⅰ・数学Aの基礎的な理解度をみるために5問の小問を出題した。それ以外の問いでは、数学Ⅰ・数学Aの各分野から出題した。

問①では、数学Ⅰの「数と式」、「データの分析」、「集合と命題」ならびに、数学Aの「場合の数と確率」から出題した。いずれも、基本的な数学の概念や考え方、計算や数式の処理についての理解を問う問題である。

問②では、数学Ⅰの「図形と計量」および数学Aの「図形の性質」から、三角形の辺の長さや三角比の関係や、外接円に関する問題を出題した。この問題では、三角比や外接円の性質についての的確な理解が必要である。

問③では、数学Ⅰの「2次関数」から、未知の定数を含む2次関数のグラフに関する問題や、グラフ上の点によって構成される図形に関する問題を出題した。ここでは、2次関数の性質についての的確な理解と、そのグラフを図形的にとらえることが要求されている。

問④では、数学Aの「場合の数と確率」から、数字の書かれたカードを用いた試行についての問題を出題した。場合の数と確率については標準的な出題であり、試行と確率についての基本的な理解を問うている。

講評

試験問題に対して、受験生は着実に対応していたように見受けられる。

もちろん、問題文の中の数値をそのまま公式にあてはめて解けるような問題ばかりということではない。問題文によって与えられた状況に基づいて、どのような関係が成立するのかを適切にとらえたうえで、解答を求めるための式を立て、さらに、計算を正確に進める必要がある。

数学の公式をそのまま覚えるのではなく、その意味や応用場面を意識しながら、問題に取り組むように心がけてほしい。いずれの問題も教科書をきちんと勉強すれば解けるレベルであり、章末問題や課題学習などを解きながら、数学が現実場面でどのように活用されているかを意識しながら勉強することを心がけてほしい。

受験生へのアドバイス

数学は、論理を順序立て思考を構築することを学ぶ教科である。論理的な思考は、理系のみならず、文系においても必要となる。例えば文章を執筆するときに、論理的な構成を考えなければ、誰も筆者の意図を理解してはくれないだろう。そのためには、単に公式を暗記するだけではなく、なぜそのような公式が導かれるのか、公式の根本的な部分を理解しておくことが必要である。

また、数学Ⅰや数学Aの範囲であっても理工系の専門分野だけでなく、文系といわれる、社会学系や人文科学系の分野でも応用されることが増えてきている。数学には、対象をどうとらえ、どう取り扱うかという、考え方の枠組みを提供する学問という側面がある。大学で志望する専門分野が文系だから数学が必要とされないわけではないことを意識して、数学の勉強を進めていくことも必要である。

入試では、時間の制約があるため、慌ててしまうこともあるだろうが、日頃から計算に親しむことで単純なミスをしないうように心がけたい。そのためには繰り返しの練習も必要である。本学の試験問題に類似した問題を問題集などから拾い出して実際に解いてみる。そして、その過程で解答が合わない場合には、どこをどのように間違えたのかを自分自身で確認しておくことが必要である。そうすることで、大問の後半で計算結果が合わない場合に、どこで間違えたのかを試験場でも認識できる力がつくだろう。

ともすると、間違えるということに対して否定的にとらえてしまい、間違えたという事実を目を向けることを拒否したくなるかもしれない。しかし、間違えたときこそが学びの大きな機会であるということを理解することが重要である。